

学生相談室 2021年度利用者統計報告

甲南大学学生相談室 西 浦 太 郎

I. はじめに

新型コロナウイルス感染症の影響により、2020年度前期は全面オンラインとなり、後期はオンライン授業と対面授業を併用する形で行われた。本報告の該当年である2021年度においてもコロナ禍は収まらず、大学は多くの困難に見舞われた。2021年度前期は、当初、感染対策を行った上で対面授業が実施されたが、感染者の急増に伴い、4月25日から6月20日まで3回目の緊急事態宣言が発令され、結局、授業の多くが対面から遠隔授業へと移行することとなった。その後、7月12日から9月30日まで4回目の緊急事態宣言が発令され、後期は、感染拡大の恐れのある大講義は遠隔で行われ、それ以外の授業は一部対面で実施されることになった。これらの状況を踏まえて2021年度の利用者統計について報告する。

II. 年間利用者数

2021年度甲南大学学生相談室の利用者（実数）

は2020年度の352名から137名増の489名（表1）となっている。これは在籍学生総数8,725名（表2）の5.6%にあたり、過去14年の中で最も高い利用率である。なお、性別で見ると女性の方が高い利用率となっている。利用件数（のべ件数）は、4,791件であり、これも過去最も多い（表7）。

本学では岡本キャンパス、西宮キャンパス（CUBE）、ポートアイランドキャンパス（FIRST）のそれぞれに学生相談室が設置されており、学生や関係者は自身が所属するキャンパスの学生相談室を主に利用するが、どのキャンパスの学生相談室も利用でき、キャンパスをまたいでの利用もあるため、統計は3つのキャンパスでの利用を合計した集計結果を用いている。

2008年度から2021年度まで、過去14年間の領域別利用者数（実数）を示したものが表3である。ここでの利用領域とは、年度ごとに担当カウンセラーが担当する学生やケースの主たる主訴を1つ選択し、それをカウントしたものである。毎回の

表1 2021年度利用率

	利用者数	在籍者数	利用率 (%)
男子	248	5,055	4.9
女子	237	3,670	6.5
不明	4	0	-
総計	489	8,725	5.6

表4 10回以上継続利用者数

	継続利用者	利用者数	利用者数に占める割合 (%)
男子	45	248	18.1
女子	46	237	19.4
不明	1	4	25.0
総計	92	489	18.8

表2 在籍学生総数

	文学部	経済学部	法学部	経営学部	理工学部	知能情報学部	マネジメント創造学部	フロンティアサイエンス学部	大学院	合計
男子	576	1,140	935	944	485	456	311	99	109	5,055
女子	1,176	419	609	633	190	67	451	71	54	3,670
総計	1,752	1,559	1,544	1,577	675	523	762	170	163	8,725

2021年4月1日 時点

表3 2008年度～2021年度までの領域別利用者数（実数）

	心理	心理検査	修学	進路	生活・健康	グループワーク	合計	在籍総数	利用率（%）
2008年度	154	24	50	10	14	13	265	9,148	2.9
2009年度	171	43	36	18	22	63	353	9,174	3.8
2010年度	212	37	43	23	23	49	387	9,376	4.1
2011年度	203	70	46	21	16	50	406	9,521	4.3
2012年度	180	34	42	30	12	27	325	9,666	3.4
2013年度	193	49	58	19	20	52	391	9,545	4.1
2014年度	170	44	45	22	11	67	359	9,235	3.9
2015年度	170	37	71	23	19	78	398	9,195	4.3
2016年度	152	13	59	29	13	64	330	9,044	3.6
2017年度	164	21	52	18	12	91	358	9,277	3.9
2018年度	158	7	70	18	19	86	358	9,252	3.9
2019年度	161	16	81	17	14	78	367	9,037	4.1
2020年度	150	0	111	17	8	66	352	8,910	4.0
2021年度	202	6	134	18	20	109	489	8,725	5.6

利用における領域・主訴はのべ件数に反映されている。

これを見ると、2021年度は〈心理相談〉の202名が最も多く、次いで、〈修学相談〉の134名、〈グループワーク〉の109名と続いている。これは、例年とほぼ同じ傾向であるが、全ての領域において利用者の実数が大幅に増えている。前年度比較で見ると、〈心理相談〉が52名増（14.8%増）、〈グループワーク〉が43名増（24.6%増）、〈修学相談〉が23名増（9.4%増）となっている。

また、2020・2021年度は〈修学相談〉が過去と比べて大幅に増加しているが、これは、新型コロナウイルス感染症の感染拡大によりオンライン授業に切り替わり、授業や単位履修に関する修学相談が増加したことが要因の一つと考えられる。

本年度の〈グループワーク〉は109名の利用と過去最多であるが、これは、特定の学部生対象のグループワークを実施したことや、コロナ禍の中で積極的に広報活動を行い、参加する意欲のある学生が参加しやすいようにグループ活動の形態を模索・構築したことが増加の要因と考えられる。

次に継続利用者（カウンセラーとのカウンセリング契約に基づき、2021年度内に10回以上、継続して学生相談室を利用した者）は、男性45名、女性が46名、その他・不明が1名で、合計92名

であった。これは学生相談室を利用する学生の18.8%に当たる（表4）。2020年度と比較をすると、19名多く継続面接を利用していることになる。

さらに、継続利用者数の年度末における相談の転帰を見ると、〈次回予約あり〉72.8%、〈on demand〉が20.7%、〈終了〉が1.1%であった（図1）。〈次回予約あり〉と〈on demand〉を合わせると、93.5%となり、過去3年の中で最も高い率となる（2018年：76.6%、2019年：82.5%、2020年：32.9%）。2021年度はコロナ禍2年目にあたるが、コロナ禍前よりも継続利用を求める者が多いことを示唆している。なお、コロナ禍が始まった2020年度（32.9%）は継続率が大幅に下がったが、オンライン授業の実施に伴い、本来ならば継続していたであろう学生の来室が減

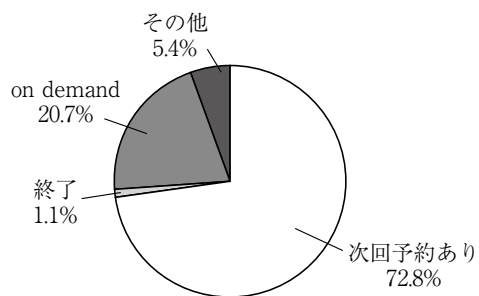


図1 相談の転帰（10回以上の継続利用者）

表5 学部・学年別利用者数（実数）

学 部	1 回生	2 回生	3 回生	4 回生	4 年以上 在籍者	卒業生	大学院生	他・不明	総計
文 学 部	29	24	30	22	10	0	2	0	117
経 済 学 部	9	11	8	8	2	0	0	1	39
法 学 部	8	19	6	9	0	0	0	0	42
経 営 学 部	12	11	13	7	3	0	1	0	47
理 工 学 部	64	3	7	10	5	0	6	3	98
知 能 情 報 学 部	3	5	8	9	2	0	1	1	29
マネジメント創造学部	6	2	8	8	2	0	0	1	27
フロンティアサイエンス学部	9	3	7	5	6	0	4	1	35
そ の 他 ・ 不 明	0	0	0	0	0	24	0	31	55
総 計	140	78	87	78	30	24	14	38	489

注：研究科・大学院生については人数が少ないため、人文科学研究科＝文学部、社会科学研究科経済学専攻＝経済学部、同経営学専攻＝経営学部、同会計専門職専攻および法科大学院＝専門職大学院、自然科学研究科物理学・化学・生物学専攻＝理工学部、同知能情報学専攻＝知能情報学部、フロンティアサイエンス研究科＝フロンティアサイエンス学部を含めている。「その他・不明」には、入学前で学年配当が相談時点ではない者、留学生、匿名での相談者等を含む。

少しなのが要因の一つとして考えられる。

次に、学部・学年別利用者数（実数）を表5に示す。最も利用者の多い学部は文学部の117名、ついで理工学部の98名、経営学部の47名であった。

本学の学部別の在籍者数であるが、文学部（1,751）が最多で、経営学部（1,577）、経済学部（1,559）・法学部（1,544）の順となっている。文学部と経営学部は、在籍者数に対して相談者数が多い状況となっている。これに対して、理工学部とフロンティアサイエンス学部は、在籍者数が少ないにも関わらず利用者数が多い点特徴的である。

学年別で最も利用者が多かったのは1回生、ついで3回生で、2回生・4回生が同じ利用者数であった。1回生の利用者140名のうち、理工学部が64名であり全体の半数近くを占めているが、この中には、同学部の授業内で実施した学生相談室のグループワークに参加した60名の1回生が含まれ、これが1年生の全体の増加につながっている。

1回生の理工学部の授業内グループワークの数を抜いた場合、3回生の利用が最も多く、1回生・2回生・4回生がほぼ同じ水準となっている。

る。例年、学年により利用者数にばらつきがあるが、本年度はどの学年も一定の利用者数があり、全ての学年で困難を抱えた学生がいて来談したといえる。

表6の学年・領域別利用者数（実数）、表7の学部・領域別利用者数（のべ件数）を見ると、実数・のべ件数ともに、ほとんどの学部で、＜心理相談＞が最も多く、次に＜修学相談＞が続いている。ただし、理工学部は利用者数（実数）において＜グループワーク＞が61名と多く、学部の利用者の62.2%を占めている。これは前述したカウンセラーがグループワークを実施している影響によるものと考えられる。

また、2021年度は、＜心理検査＞の利用者数（実数）が6件であった。2020年は0件であったが、新型コロナウイルス感染症の影響により、新入生向けオリエンテーションを実施できず、心理検査を希望する新入生の利用がなかったことが影響している。2021年も対面による新入生オリエンテーションを実施できなかったにも関わらず、心理検査を希望する学生が増えた。これは、行動制限が緩和され、学生が相談室に来室しやすくなったことや、学生側に自分を知りたいというニーズがより高まったため、増加した可能性があると考え

表6 学部・領域別利用者数(実数)

学 部	心 理	心理検査	修 学	進 路	生活・健康	グループワーク	総 計
文 学 部	62	3	33	6	1	12	117
経 済 学 部	17	0	17	1	0	4	39
法 学 部	18	0	14	2	0	8	42
経 営 学 部	18	1	15	0	3	10	47
理 工 学 部	22	1	12	0	2	61	98
知 能 情 報 学 部	10	0	14	2	3	0	29
マネジメント創造学部	19	1	4	0	1	2	27
フロンティアサイエンス学部	14	0	13	0	2	6	35
そ の 他 ・ 不 明	22	0	12	7	8	6	55
総 計	202	6	134	18	20	109	489

注：研究科・大学院生については人数が少ないため、人文科学研究科＝文学部、社会科学研究科経済学専攻＝経済学部、同経営学専攻＝経営学部、法科大学院＝法学部、自然科学研究科物理学・化学・生物学専攻＝理工学部、同知能情報学専攻＝知能情報学部、フロンティアサイエンス研究科＝フロンティアサイエンス学部を含めている。「その他・不明」には、入学前で学年配当が相談時点ではない者、KIECに属する留学生、匿名での相談者等を含む。

表7 学部・領域別利用者数(のべ件数)

学 部	心 理	心理検査	修 学	進 路	生活・健康	グループワーク	総 計
文 学 部	938	17	372	57	14	31	1429
経 済 学 部	181	3	102	7	1	6	300
法 学 部	277	4	117	22	7	32	459
経 営 学 部	311	4	109	42	7	82	555
理 工 学 部	398	10	287	6	15	137	853
知 能 情 報 学 部	201	6	90	26	4	7	334
マネジメント創造学部	158	7	51	7	2	2	227
フロンティアサイエンス学部	135	4	208	4	21	6	378
そ の 他 ・ 不 明	50	0	32	25	104	45	256
総 計	2,649	55	1,368	196	175	348	4,791

注：研究科・大学院生については人数が少ないため、人文科学研究科＝文学部、社会科学研究科経済学専攻＝経済学部、同経営学専攻＝経営学部、法科大学院＝法学部、自然科学研究科物理学・化学・生物学専攻＝理工学部、同知能情報学専攻＝知能情報学部、フロンティアサイエンス研究科＝フロンティアサイエンス学部を含めている。「その他・不明」には、卒業生、入学前で学年配当が相談時点ではない者、KIECに属する留学生、匿名での相談者等を含む。

えられる。

表8および表9は、学年・領域別利用者数の実数とのべ件数である。実数では1回生の利用者が最も多く、次に3回生、そして2回生・4回生が同じ値となっている。

のべ件数では4回生の利用件数が最も多く、2回生と3回生がほぼ同じ利用件数となり、その後に1回生が続く形となっている。過去と比べ2021年度の2回生の相談件数が増加しているのが特徴的である。

領域ごとにもみると、〈心理相談〉では、実数では3回生が最も多く、その後4回生が続き、1・2回生が同程度となっている。学年が上がると卒業を前にして、それまで積み残してきた心理的な

課題に取り組むことを余儀なくされたりする場合があるため、上回生の相談が増えた可能性がある。また、〈心理検査〉では、4回生ののべ件数が多く、その後に3回生、1回生、2回生と続く。

〈修学相談〉は、実人数は1回生が最も多いものの、2回生が2番目に多く、さらにのべ利用件数においては、2回生が他の学年を大きく引き離して最多となっている。この学年は、コロナ禍が始まった2020年に入学し、1年目の多くをオンライン授業で受けた学年であり、それまで表面化しなかった修学面での困りごとが2年目になって現れ、学生相談室にて何らかの支援を受けている可能性がある。

表8 学年・領域別利用者数（実数）

学 年	心 理	心理検査	修 学	進 路	生活・健康	グループワーク	総 計
1 回 生	28	2	36	0	3	71	140
2 回 生	30	1	30	2	3	12	78
3 回 生	50	1	17	4	2	13	87
4 回 生	46	2	18	4	1	7	78
4年以上在籍者	13	0	15	1	1	0	30
卒 業 生	15	0	2	7	0	0	24
大 学 院	9	0	3	0	2	0	14
その 他・不明	11	0	13	0	8	6	38
総 計	202	6	134	18	20	109	489

表9 学年・領域別利用者数（のべ件数）

学 年	心 理	心理検査	修 学	進 路	生活・健康	グループワーク	総 計
1 回 生	339	8	250	3	5	138	743
2 回 生	441	4	343	10	14	19	831
3 回 生	594	14	155	38	16	22	839
4 回 生	842	19	160	61	24	128	1,234
4年以上在籍者	213	8	281	40	8	1	551
卒 業 生	19	0	2	41	0	0	62
大 学 院	158	2	152	2	4	30	348
その 他・不明	43	0	25	1	104	10	183
総 計	2,649	55	1,368	196	175	348	4,791

注：研究科・大学院生については人数が少ないため、人文科学研究科＝文学部、社会科学研究科経済学専攻＝経済学部、同経営学専攻＝経営学部、法科大学院＝法学部、自然科学研究科物理学・化学・生物学専攻＝理工学部、同知能情報学専攻＝知能情報学部、フロンティアサイエンス研究科＝フロンティアサイエンス学部を含めている。「その他・不明」には、入学前で学年配当が相談時点ではない者、KIECに属する留学生、匿名での相談者等を含む。

＜進路＞は、のべ件数では4回生と3回生が多いが、これは学年が上がるにつれ、進路について色々と考えたり、現実的に検討したりする必要性が増してくるためと考えられる。＜生活・健康＞では、他の領域に比べて実数・のべ件数ともに少なく、のべ件数で学年別に見ると、4回生が最も多く、3回生・2回生がそれに続いている。＜グループワーク＞は、1回生が実数・のべ件数ともに最も多い。その一方で、4回生は実人数が少な

いにも関わらずのべ件数が多い。これは、4回生がカウンセリングなど複数のサービスを利用しながらグループワークに参加している可能性を示唆しているといえる。

最後に、表10の来談者・領域別利用者数（のべ件数）について述べる。学生本人の利用では、＜心理相談＞が最も多く、心理に関する相談が学生相談室における重要な役割の一つになっている。その後、＜修学相談＞、＜グループワー

表10 来談者・領域別利用者数（のべ件数）

来 談 者	心 理	心理検査	修 学	進 路	生活・健康	グループワーク	総 計
本 人	2,351	55	551	151	103	348	3,559
両 親	2	0	3	1	0	0	6
父 親	8	0	6	2	0	0	16
母 親	99	0	55	4	2	0	160
教 員	183	0	753	38	69	0	1,043
そ の 他	6	0	0	0	1	0	7
総 計	2,649	55	1,368	196	175	348	4,791

ク>、<進路>、<生活・健康>の順になっている。

一方、両親、父親、母親などの家族の利用であるが、<心理相談>、<修学相談>の順に多く、家族が自分の子どもの心理面や、修学における心配事を抱えていると考えられる。

次に、教職員では、<修学相談>が<心理相談>の4倍以上あり、その後、<生活・健康>、<進路>と続く。これは2019・2020年度と同じ傾向である。背景には、教職員が学生相談室に相談する場合に加え、学生相談室のカウンセラーが本学の障害学生の修学支援を行う YOU ステーションにはほぼ毎週、定期的に出向し、コンサルテーションや連携を行っていることも修学相談が多い一因になっている。

Ⅲ. 月別利用状況

1. 項目について

利用者を月別に集計したものが図2である。ここではまず、図の中の各項目について説明する。<来室相談>とは、学生本人もしくは保護者等(友人、教職員も含む)が直接、来室し、カウンセリングまたはガイダンスを受けたものである。一部、カウンセラーが YOU ステーションなど学内の他の部署に出向き、行ったコンサルテーションも含む。なお、コロナ禍が始まった2020年度か

ら現在まで、カウンセラーが必要と判断する場合は対面で実施している。

次に<心理検査>は、性格や職業に関する検査、描画を用いた検査、結果のフィードバックが含まれる。

<ビデオ通話>とは、主に Zoom を用いたオンライン相談を指す。新型コロナウイルス感染症の影響を受けて、2020年度より導入された面接方法である。

<電話相談>とは、電話による相談、コンサルテーションを含んでいる。なお、当相談室では、学生とはメールのやりとりは行わず、教職員に対してのみ電子メールでの対応を行っている。

また、<グループワーク>は、a) 学生相談室が後期に開催したグループワーク、b) 後期の講義期間中の毎週金曜日の午後に行ったウィークリーグループ「金曜 Re アワー」に参加したもの、c) 後期の毎週月・火曜日に開催された、学生がカウンセラー数名と昼食後の時間帯に歓談する「トークタイム」のいずれかに参加したものを意味する。

2021年度は、感染症対策を実施した上で開催し、a) <グループワーク>は、前・後期に1回ずつ、b) 「金曜 Re アワー」は、学期中に週1回対面で実施した。なお、c) 「トークタイム」と<グループワーク(ビデオ通話)>は、オンライ

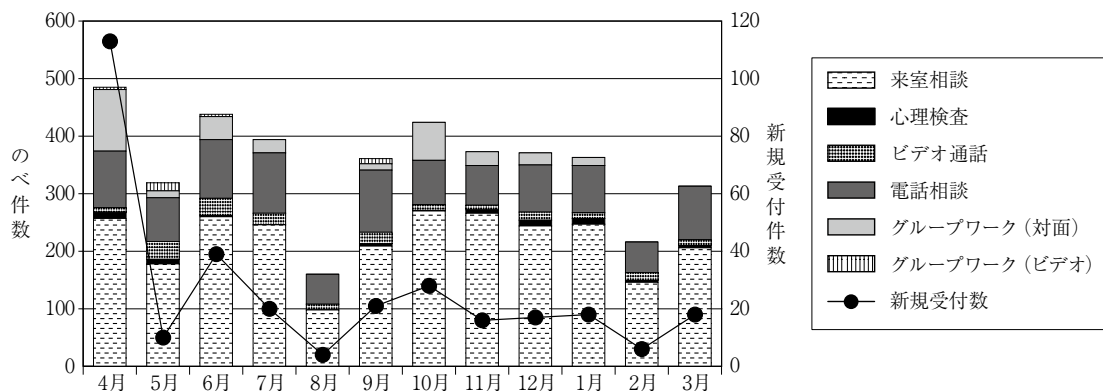


図2 月別利用状況 2021.4.1～2022.3.31

ンと対面で行った。

2. 月別利用状況の推移と相談形態

次に2021年の相談ののべ件数の推移について述べる。相談のピークは4月、6月、10月の3回ある。それぞれ、前期・後期の学期が開始する時期であり、相談に関するニーズの高さが伺える。

コロナ禍前は、各学期開始時に相談件数が増え、その後減少傾向に転じる傾向にある。しかし、コロナ禍2年目の2021年度は、4月・6月・7月、また、10月・11月・12月・1月と、数カ月に渡って相談数が一定数ある点が特徴的である。これは、コロナ禍で潜在的に相談ニーズのあった学生が、修学や心理面で困ったために、長期間、継続した関りを必要としたためと考えられる。また、例年、3月の長期休みは相談件数が減少するが、2021年度は、むしろ休み期間に増えており、新学期に向けた学生・教職員の高いニーズが伺える。

次に、新規の相談受付件数（実人数）であるが、4月が最多であり、5月に大きく減少し、その後6月に再び増え、8月に向けて減少している。長期夏季休暇に減少するのは例年通りの傾向である。後期が開始する9月・10月に増加し、11月に減少に転じるが、その後、2022年1月まで同

じ水準で推移している。このことから、前期・後期も学生や教職員の相談ニーズがコンスタントにあったことが分かる。また、3月に再び増加しているが、2021年度後期の成績発表を受けての相談や、新学期開始に向けての相談が増えたことも一因と考えられる。

2021年の相談形態の内訳のパーセンテージを図3に、数値の内訳を表11に示した。これを見ると来室相談が54.8%と最も多く、それについて電話相談が20.8%、メール相談が10.5%、そしてグループワーク（対面とビデオ通話含む）が6.6%となっている。

コロナ禍2年目においても学生・教職員が、遠隔よりも対面での相談を望む傾向が見て取れる。また、電話相談とメール相談は、相談者側のニー

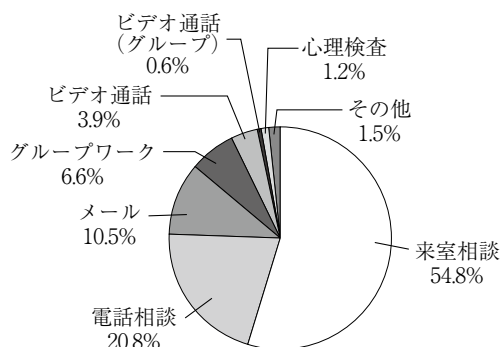


図3 相談形態の内訳

表11 相談形態の内訳（月別）

月	来室相談	心理検査	ビデオ通話	電話相談	グループワーク	ビデオ通話 (グループ)	メール	手紙	その他	総計
4月	257	10	9	98	107	4	25	4	2	516
5月	178	8	31	76	12	14	23	5	0	347
6月	260	2	30	102	40	4	49	5	2	494
7月	246	0	20	105	23	0	42	7	1	444
8月	98	0	10	52	0	0	29	6	1	196
9月	209	4	20	108	11	9	30	3	0	394
10月	270	1	10	77	66	0	51	8	1	484
11月	266	6	8	69	24	0	54	1	0	428
12月	244	10	14	82	21	0	55	7	0	433
1月	247	10	10	82	14	0	51	6	0	420
2月	146	3	14	53	0	0	40	7	1	264
3月	206	4	10	93	0	0	52	5	1	371
総計	2,627	58	186	997	318	31	501	64	9	4,791

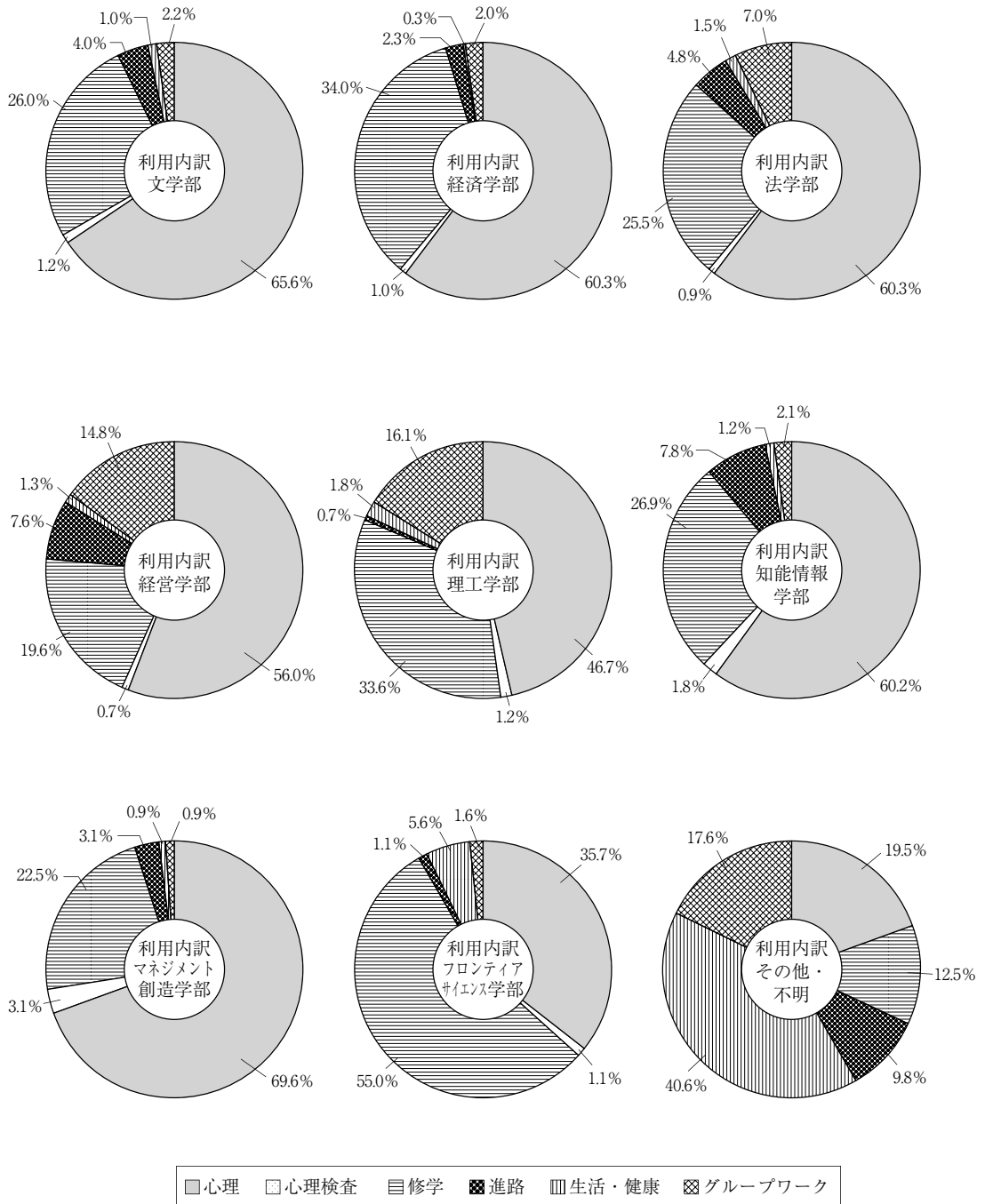


図4 2021年度学部別利用内容の割合 (のべ件数)

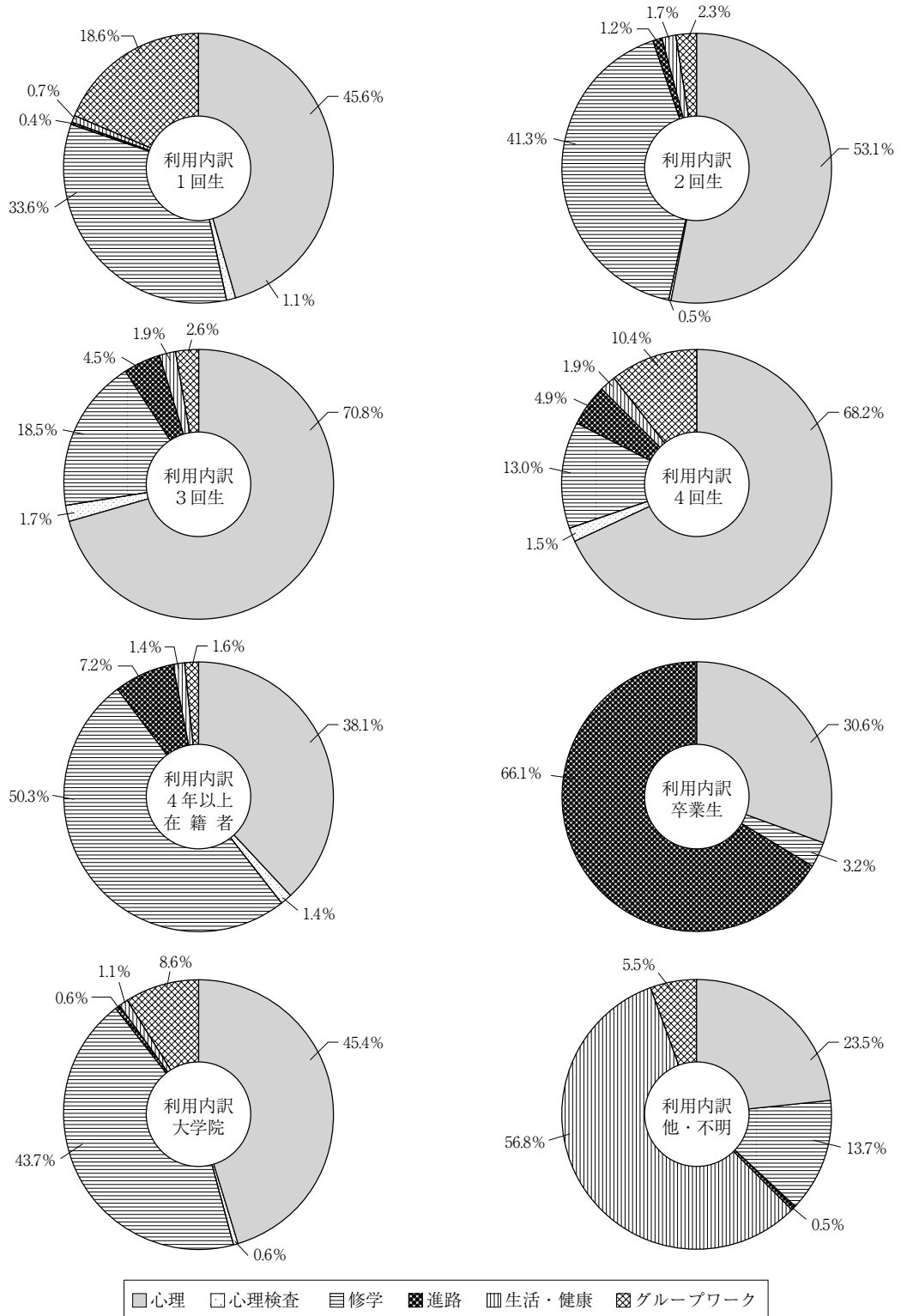


図5 2021年度学年別利用内容の割合 (のべ件数)

ズを鑑みた結果、選択された手段であり、いずれも学生相談における相談業務を行う重要なツールとなっている。

なお、コロナ禍で初めて実施した Zoom 機能を用いたビデオ通話（個別とグループ相談）は、合計217件あり、全体に占める割合は、4.5%である。対面での相談に取って代わる程の割合ではないものの、年間217件もの面接が Zoom で行われていることを考えると、それなりに学生のニーズがあり、学生相談室として今後も継続して実施していく価値はあると思われる。

IV. 利用内容

図4は学部別の利用内容割合の内訳を示したものである。文学部・経済学部・法学部・知能情報学部では<心理相談>が6割以上と高い割合を占め、ついで<修学相談>となっている。心理相談が多い傾向は、例年通りである。学部別で見ると、マネジメント創造学部では<心理相談>が

69.6%あり、修学相談が他学部と比べて高い結果となっている。また、経済学部は、<心理相談>が60.3%であるが、同時に<修学相談>が34.0%と他の文系学部と比較した場合、修学相談がやや多い傾向にある。

一方、理系学部を見ると理工学部では、<心理相談>が46.7%と比較的少なく、<修学相談>が33.6%を占めている。また、フロンティアサイエンス学部では、<心理相談>が約35.7%、<修学相談>が55.0%と、<修学相談>の方が高い結果となっている。

これら2学部の修学相談が多い背景として、学部の専門性や、学生個々人の困りごとが影響し、学生相談室スタッフによる専門的な関りを必要とするケースが多いためと考えられる。

次に、図5に学年別の利用内容の内訳を示す。学年別で<心理相談>の割合を見ると、3回生が70.8%と最も多く、ついで4回生の68.2%、2回生の53.1%となっており、上の学年程、<心理相

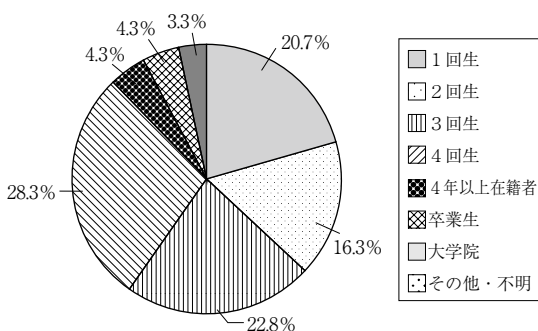


図6 学年別継続利用者数（10回以上）の割合

付表1 領域別下位項目

心理	性格／対人関係／異性問題／家族・友人・その他／精神衛生※／その他
心理検査	性格検査／職業興味・適性検査／フィードバック
修学	学業・履修／転部・転学科／留年・休学・退学／転校・再受験／留学／資格／課外活動／その他
進路	進学・就職・将来／その他
生活・健康	経済・アルバイト／生活環境／事件・事故／健康・身体一般／その他
グループワーク	グループワーク／ウィークリーグループ／ランチアワー

※「精神衛生」には、精神科医療を並行して必要とするような症状をもつ者が分類される

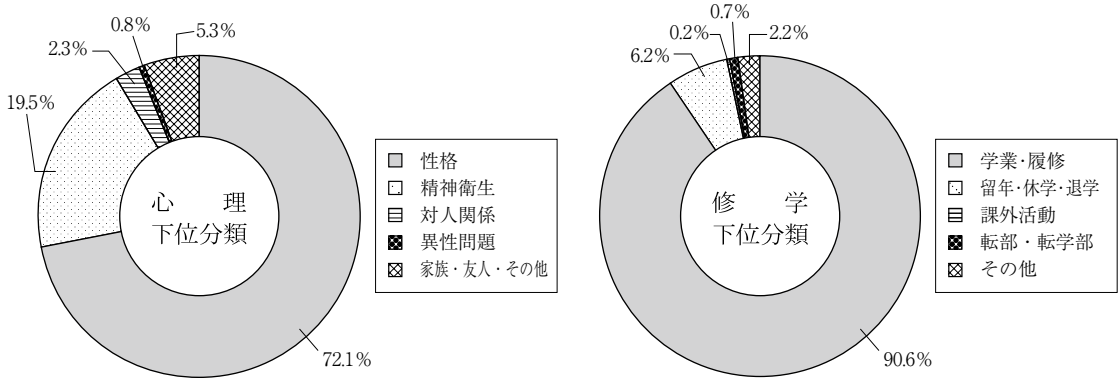


図7 心理・修学領域における下位分類別利用割合（のべ件数）

談>が増えていることが分かる。

<修学相談>は、4年以上の在籍者（50.3%）、大学院（43.7%）、2回生（41.3%）、1回生（33.6%）の順に多くなっている。

4年以上の在籍者の修学に関する相談が増えるのは、4年以内で卒業ができなかった学生が修学面での支援を多く必要とするためである。また、大学院生は専門性が高まるため、修学相談が増えるのはある程度、予想ができる。しかし、例年と違い2回生の修学に関する相談が多い点は、注意してみる必要がある。これは、コロナ禍のオンライン授業や、対面でのキャンパスライフが制限されたことにより、修学面の困難が顕在化し、学生相談室に援助を求めたためと考えられる。

次に<グループワーク>であるが、各学年で高い割合を示しているのは、1回生（18.6%）と4回生（10.4%）、大学院（8.6%）である。1回生では、前述した理工学部での授業の一環としてのグループワーク協力が強く影響していると考えられる。

3回生から<進路>の相談が増え始めるのは、2019・2020年度と同じ傾向である。

図6は、年度内に10回以上継続して利用した学生の各学年の割合を示している。10回以上の継続利用者数の割合は、4回生の利用が最も多く

（28.3%）、ついで3回生（22.8%）となっている。その後、1回生の利用（20.7%）、最後に2回生（16.3%）の相談となっている。

次に、<心理相談>と<修学相談>の利用内容別の割合を図7に示す。利用内容は、付表1のように心理と修学はそれぞれ6領域に分類され、さらに下位項目が設けられている。

<心理相談>では、「性格」についての相談が72.1%を占め、ついで、「精神衛生」が19.5%と続く。これら2つで90%程度を占めるのは例年通りの傾向である。

<修学相談>では、「学業・履修」が90.6%と最も高く、続いて「留年・休学・退学」が6.2%となっている。これも2020年と同様の傾向である。

V. おわりに

2019年末にコロナ禍が始まり、2021年度も先行きが見通せない中で開始した。結局、2021年度も感染は収まらず、行動制限の影響を強く受け、遠隔と対面が織り交ざった形で授業が実施され、コロナ禍の影響を2年間、受けたことになる。2020年度が、コロナ禍が学生生活を直撃し、多くの混乱が生じた年であるとすれば、2021年度は、それまでのコロナ禍による様々な影響が、徐々に顕在化した時期であったといえる。このことは、学生

相談室に過去最多の学生が訪れたことにも表れているといえる。

本学の学生相談室は、コロナ禍が本格的に始まった2020年度から対面・非対面での面接を継続して行ってきた。そして、同年の後期から相談件数が増え、2021年の前期・後期も面接枠がほぼ埋まっている状態で稼働し、学生や保護者、教職員のさまざまな困りごとに対応してきた、もしくは、応えようとしてきた。学生相談室において対応した相談件数の多さをなんらかの「問題」として見るのか、もしくは、カウンセラーが問題を抱え、悩んでいる学生や関係者と共に考え、学生が自分の道を見つけられた機会として見るのかでは、大きな違いが生まれるであろう。その一方で、コロナ禍の中で、感情労働を長期に渡り行うスタッフの疲労の蓄積も心配され、持続可能な形でいかに相談活動や学生相談室における諸活動を行っていくかを考える時期に来ているようにも思われる。

本報告は2021年度の利用者統計であるが、2022年度の状況について述べると、一定数の履修者がいる大講義の授業は遠隔で行われたが、それ以外の多くの授業が対面や、対面と遠隔を織り交ぜた形で実施された。前期と後期の終わりごろに一時的に感染者数が非常に増えた時期があったが、それでも対面授業を継続した理由は、対面で諸活動を行うことの価値が認められたがためであろう。そして、2023年度は、本学は全面对面授業に移行する予定である。

しかし、これにより通常的生活や状態に「戻る」と考えるのはやや短絡的であろう。依然としてコロナ禍による学生への影響は続いており、それらが学生の心理・修学・就職活動にどのような中期・長期的な影響を及ぼすかは不明な点が多い。今後、学生や学生を取り巻く環境の声を聴きながら、学生のニーズに沿った学生相談活動を行っていきたい。